

藤本建夫

『ドイツ自由主義経済学の生誕 ——レプケと第三の道——』

(ミネルヴァ書房, 2008年 (xix+564+23ページ))

加 来 祥 男

本書の課題は、ドイツ自由主義経済学者ヴィルヘルム・レプケの社会思想を「思想の形成史を縦軸に、現実の政治経済社会を横軸」して辿り、それをおして「<人間的な社会>の社会経済体制とは何か」を問い続けたレプケの学問的営為の根底ある「ヒューマンな核」(i ページ)を描き出すことにある。まずは本書の粗筋を辿ることとしよう。なお、著者が「」付きで用いている言葉は、基本的には<>で示すこととする。

I

序章「ヴィジョンをめぐる神々の闘い」は、広い意味でレプケの同時代人であるシュンペーター、ケインズ、ハイエク3人が抱いたヴィジョンとその特徴を明らかにし、それと対比しながらレプケの位置づけを試みている。

資本主義の成功こそがそれを擁護している社会制度をくつがえすと考えたシュンペーター、政府がサーモメーターの役割を担う「成熟経済」の延長上に「黄金時代」の到来を予言したケインズ、19世紀の自由なイギリス経済社会を理想と考え、そこからコレクティヴィズムへの逸脱を問題にしたハイエクに対して、レプケは、市場経済は<文明の創造品>であり、それを実現・

維持するには国家が市場の枠組みを監視することが必要であるとして、〈第三の道〉論を提起した。その特徴は「社会学と交差しあうヒューマンな社会の経済学」にあり、そこには「歴史学派の痕跡」(10ページ)が認められるというのが、大きな見取り図である。

本論部分は、出生からナチス体制下で亡命するまでのレプケを対象とする第1部「賠償・大恐慌・ナチス」(第1～6章)と、1940年代前半に相次いで刊行されたレプケの三部作を分析の中心に据える第2部「レプケの三部作と〈第三の道〉」(第7～14章)とから成り立っている。

II

第1章では、出生から教授資格論文までのレプケが対象とされる。

北ドイツの王宮都市ツェレに近い小村落で1899年に田舎医者の子として生まれたレプケは、ギムナジウム時代をハンブルク対岸のシュターデという小都市の農村的環境のなかで過ごした。彼は、主としてマールブルク大学で法律学、国家学を学び、1921年には「ドイツ・カリ協業における作業能率」という学位論文を、翌年には教授資格論文「景気変動」を完成させた。前者においてレプケは、作業能率を規定する要因として〈客観的諸要素〉と〈人間の諸要素〉をあげ、とくに後者を重視して、カリ労働者が農業との結びつきをもつという「農村的な特質」を評価する一方(これらは、著者によって「歴史学派の影響」(51ページ)と評価されている)、労働者を〈成熟した工業市民〉に教育するという点から20年の「経営協議会法」に大きな期待をかけた。

教授資格論文では、景気変動を引き起こす要因が〈客観的要素〉と〈心理的要素〉に分けて考察される。前者はさらに〈経済外的要素〉と〈経済的要素〉に分けられ、〈経済外的要素〉では政府の経済政策の可能性が、〈経済的要素〉では財貨による需要の弾力性のちがいが注目される。レプケによれ

ば、景気変動においては＜心理的要素＞が最も重要であり、「社会の心理や思惑が直接反映される場」としての証券取引所が景気に対して＜先導的＞役割を果たす。さらに公共事業による需要創出が景気を回復させることは可能であるが、そこでは政府の「毅然たる態度」が必要である。こうしたレプケの考えを紹介した著者は、そこにみられる特徴の1つを、「歴史学派の発想に加えて市場の需給関係から景気を議論して自由主義経済学者としてのレプケが現れている」（65ページ）点に見出している。

1922年にマールブルク大学私講師となったレプケがまず取り組むことになったのは、賠償問題であった。第2章はこれを扱っている。24年にはドーズ案に沿った賠償支払が始まったが、賠償問題に関しては、ドイツ側の支払とその外貨による送金の区別、ドイツの支払能力やその前提となる国際収支の問題などが絡んで、国際的な規模で様々な議論がなされた。その後、ドーズ案を引き継いだヤング案が調印された1930年1月には、ドイツ経済はすでに世界恐慌の渦のなかに巻き込まれていた。こうした動きのなかで、レプケは当初、賠償支払継続のためにはドイツの貿易余剰が確保されねばならず、その前提として自由貿易が必要であると主張したが、これは31年に著された『災厄の道』では、次のように修正された。即ち、1920年代には世界的に技術革新がすすみ、貿易も拡大する一方、＜国家干渉＞が経済のダイナミズムを妨げるようになった。それは＜トロイの木馬＞に譬えられる。また、不況脱出の鍵を握るのは政治的・経済的＜信用＞の回復にあるが、賠償問題は＜不安の滞積＞の主要な一つだと捉えられた。こうしてレプケは、賠償の全額削除を最善の解決策としたのであった。著者は、「レプケは賠償論争に深く関与することによって国際経済学の分野に守備範囲を広げ、明確に自由主義者として自己形成していった」（125ページ）、と述べるとともに、『災厄の道』におけるレプケの関心が賠償問題の枠を超えて西洋文明に向けられ、それが危機に直面しているという認識に達していたことを指摘している。

第3, 4章は大恐慌にかかわる問題を扱っている。1931年1月, ブリュニング内閣の下で, 労働大臣経験者ブラウンスを委員長として設置された「失業問題検討委員会」の課題は, 失業克服策と失業者扶助政策について意見書を提出することであった。3月末に出された第1答申につづく4月29日付の第2答申「雇用創出による失業問題の克服」は, 外国からの長期資本の導入をもとにした公共投資による雇用創出を提案し, 5月28日の第3次答申もそれを確認したが, ここには, 委員として参加したレプケの考えも反映されていた。その後, ライヒスバンクとフリードリッヒ・リスト協会が中心となって31年9月16, 17日に開催された, 「信用拡大の可能性と結果」をテーマとする通貨会議にも, レプケは参加した。ザリーンの積極的信用拡大論から<正統派的・保守的>なヒルファディングまで, 政策担当者や経済学者の恐慌認識と政策論がパノラマ状に展開されるなかで, レプケは, 景気の落込みが極端なく<二次不況>の<累積的な下降過程>に限定して, <起爆>としての<積極的信用政策>を認める議論を展開した。これには「のっぴきならない事情」があったのであり, ナチスの政権掌握後には, 「レプケの議論からも積極的景気政策論は次第に後景に退いていく。」(205ページ)

1930年代初頭にナチスが台頭し, 反資本主義的な知識人が雑誌『タート』を拠点に活動を活発化させると, レプケはそれに対抗する論陣を張った。彼は, 資本主義の歪みを封建的・前近代的な残滓によるものとする一方, 資本主義の機能麻痺の原因を干渉に求めるとともに, 自由な国際経済関係の再建を期待してアウトアルキー論を批判した。さらにナチス政権掌握直後の講演「時代の転換期か」では, 自由・理性・ヒューマニズムを基本要素とする自由主義が, 2000年の伝統をもつ「西洋社会の文化価値」(219ページ)であると強調され, それを破壊するナチスの野蛮が批判された。レプケは亡命を余儀なくされた。(第5章)

1933年10月から4年間イスタンブール教授として過ごしたトルコ時代に,

『ドイツ自由主義経済学の生誕——レプケと第三の道——』

とくに社会学者リュストウとの交流のなかで、レプケの社会学者としての認識は深まった。それが第6章のテーマである。ナチス体制だけでなく社会主義体制をも含むコレクティヴィズムに関心を広げ、自由主義的資本主義体制への確信を深めたレプケは、〈適合的な干渉〉の必要性を認めながらも〈積極的景気政策〉には疑問を抱き、ニューディール政策を批判した。また、世界経済が金本位制と長期的な通商条約に支えられれば、景気は回復できるとも論じた。そして、37年出版のテキスト『経済学』の最終節で〈第三の道〉論が提起された。これは、〈自由主義とコレクティヴィズムとの永遠の対立の解決策〉(266ページ)として、市場経済の秩序を重視しながら、それに必要な枠組みを国家が責任をもって担うという〈中庸と調和の道〉であり、〈自然的秩序への道案内となるべき〉(268ページ)のものであった。レプケは、バルギーやスウェーデンなどで〈第三の道〉にあたる経済政策が実施されているとして、自信を深めた。

III

第7章でケインズをとりあげ、彼が楽観的に「バラ色の未来像」を示したことを確認した著者は、第8章では「ウォルター・リップマン・シンポジウム」に注目している。これは、1938年にパリで、当時のヨーロッパを代表する自由主義者が集まって開催されたものであり、5日間の討議を経て「自由主義のアジェンダ」が採択された。これにはレプケとリュストウも参加していた。二人が共同で書いた「覚え書」は、社会の諸領域に根差す現代危機の原因解明には社会諸科学の「総合」が必要であるという視座から、労働・生活形態の探求、国家の弾力性や適応性、国際関係の規範・条約体制とそれを順守する意思、競争原理を経済外的な枠組みに組みこんだ社会統合、といった論点を取りあげ、レッセフェールと全体主義的コレクティヴィズムの間の〈第三の道〉を示唆するものであった。

レプケは、1937年秋にジュネーブ国際問題研究大学院大学教授に就任し、ジュネーブを永住の土地とした（第9章）。42年から45年にかけてレプケの3冊の著作が相次いで出版された。それらを順次取り上げたのが第10～12章である。第1作『現代の社会的危機』は、＜現代社会の危機的状況＞について＜最初の全体像＞を提示する試みであった。レプケによれば、合理主義の＜嫡出子＞である＜経済的自由主義＞が＜巨物崇拜＞と人間性喪失をもたらした。現代はそうした＜精神的空位の時代＞（334ページ）であり、＜大衆化＞・＜プロレタリア化＞という社会荒廃の現象、コレクティヴィズムという国家・経済体制はそれに対応するものであった。これに対抗しうる「新たな価値」（340ページ）を模索したレプケは、＜農民と都市文化との間にあるバランス＞が保たれ、「20世紀精神に親和的な＜国民精神＞を体現していた」（341ページ）スイスにあるべき社会像を求めるとともに、＜全体綱領としての第三の道＞（350ページ）を提起した。それは、市場経済順応型の＜合理的国家介入＞によって健全な市場競争秩序が成立する社会であった。

第2作『人間の国——社会改革と経済改革の根本問題——』（邦訳の題名は『ヒューマンイズムの経済学』）は、戦後の経済体制が模索されていた1944年に公刊された。これは、＜人間社会一般の根本問題のみならず、人間にふさわしい《ヒューマン》な社会の根本問題＞（364ページ）を扱ったものであった。本書では、現代危機の捉え方については前著の論旨を引き継ぎながら、＜真の競争秩序の確立＞のための国家干渉のあり方が、市場の規則や機能、市場経済の社会的前提条件、個人原則と社会およびヒューマンイズムの原則とのバランス、という位相毎に整理され展開された。また、自由と秩序を備えた「＜適法＞な国家」の特徴が協同的・自由主義的・地方分権的組織に求められ、それはカトリック社会理論の「補完性原則」に相当する、とされた。レプケのこうした理想社会は「スイスの谷間共同体、農民の共有地、都市手工業、大学、修道院などの協同組合的自治社会」（376ページ）のイメー

『ドイツ自由主義経済学の生誕——レプケと第三の道——』

ジから得られたものであった。他方では、〈大衆化〉〈プロレタリア化〉に対する解決方法としては、財産所有による〈プロレタリアの向上〉を要求した1931年のローマ教皇回勅「社会秩序の再建」が評価された。さらに、経済に関しては、工業における中小経営の優位性と農業における農民的経営の重要性が指摘されるとともに、景気政策については、「非常手段として公共投資による〈起爆〉」、〈呼び水政策〉（390ページ）が必要とされながらも、それを永続化させてはならない、とされた。

三部作を締めくくる『国際秩序』の序文の日付は1945年1月である。レプケは、将来に対する不安を募らせながらも、〈救済は断固として理想に向かうしかない〉（424ページ）という信念からこの本を書いた。彼によれば、国内秩序の崩壊と国際危機とは同根であり、ただ一つ可能な解決策は〈経済の非政治化〉、つまり自由主義的経済秩序の建設である。それには、金本位制を基礎とした〈国際経済関係の市場経済形態〉（447ページ）の形成が重要であるとされ、「ゲームの指導権を握る」英米両国が〈意識的に合理的景気政策〉（449ページ）を行う自覚と責任をもつことが求められた。

レプケの思想形成と活動がドイツの国外でなされた間、フライブルクを中心として「ドイツに残った自由主義者たち」も様々な活動を展開した。それをオイケンを中心にみているのが第13章である。「古典的自由主義観」をもち、国家干渉による経済の〈政治化〉に早くから危機感を抱いていたオイケンは、1938年刊行の『国民経済学』、40年刊行の『国民経済学の基礎』において、〈中央統制（指導）経済〉と〈交換経済〉という理念型を構築し、それに基づいて〈実際の秩序〉が秩序原則から逸脱していることを指摘した。それはナチス経済体制批判の意味を含むとともに、経済秩序の再構成が構想される基礎となった。国家が経済秩序に責任を持ち、競争条件の維持に努める〈別種の経済秩序〉、つまり〈第三の道〉が提唱されることとなったのである。

レプケは戦後も意欲的に活動した。それをとりあげたのが第14章である。レプケは、1945年には『ドイツ問題』を出版して、ナチスの歴史的根源を解き明かし、分権の原理に基づく新たなドイツ国家建設の理念を打ち出した。著者は、その論法がドイツ社会史学派の議論に似ていることを指摘している。

CDU が〈社会的市場経済〉を基本に据えたデュッセルドルフ綱領を採択したのは1949年であったが、翌年、レプケは、アデナウアーからの依頼によって「新ドイツの市場経済の状況と諸問題」に関する報告書を書いた。レプケによれば、選択すべき経済体制はあくまで市場経済であり、「農民的近郊農業と高度に発展した工業の飛びぬけた弾力性」をもつベルギーがモデルとなる。また、〈自由な価格メカニズム〉を再生させた点で経済改革の意義は大きく、ドイツ国民の生活水準を向上させた〈市場経済の再建は形容詞《社会的》を主張することができる〉（518ページ）として、「社会的市場経済」の呼称が正当化された。他方、欧州支払同盟やシューマンプランに示される〈ヨーロッパ計画経済の試み〉は、国際自由貿易論者レプケにとっては、許すべからざる計画であった。

「レプケの社会経済思想の今日的意味」と題された終章では、著者は、社会主義崩壊後のグローバル化によって「競争の〈モラル蚕食化〉現象」（529ページ）が進行していることを指摘し、それに対する警鐘を鳴らして〈心の準備〉を説いている。レプケが『災厄の道』の末尾で社会的崩壊について鳴らした警鐘を思い出しながら。

IV

本論だけでも500ページをこえる本書の内容を限られた紙幅で要約するのは容易ではなく、省略せざるを得なかった論点も少なくないけれども、評者は、レプケの思想展開の基本線を以上のように理解した。

本書を読み終えて最初の感想は、著者が、種々の障害を乗り越えて、20年

『ドイツ自由主義経済学の生誕——レプケと第三の道——』

にわたる研究の成果をまとめあげられたことに対する祝意と敬意の気持ちである。「過去と現代を架橋できるパースペクティヴ」を問うという真摯な学問的関心が著者の研究活動を支えたものと思われるが、そのことの大事さを評者も切実に感じている。

本書は我が国における最初の本格的なレプケ研究であり、ケインズやハイエク、さらにはオイケンとの対比を意識しながら、レプケの思想の歩みとその特徴を微細に描き出している。著者の構図の取り方やその基礎となるレプケ読解については、議論が可能であり必要でもあろう。しかし、遺憾ながら評者にはその能力がない。以下では、著者が提示したレプケ像をそのまま受けとめたうえで、そこで学びとったことを確認するとともに、考えた問題や抱いた疑問を書きとめることとする。

レプケは、その時々の緊要の問題と取り組むなかで、積極的に発言するとともに、視野を広げ思考を深めて、芯の強いヒューマニストとしてスケールの大きな思想的世界を作り上げていった。本書における警世家としてのレプケ像はリアルであり、レプケの「ヒューマンな核」を描き出すという著者の目標は十分に達成されている。また、思想家レプケについて、評者は本書から多くを学ぶことができた。とくに印象に残ったのは、①トルコ亡命時代、リュストウとの交流がレプケにとって重要な意味をもち、そこで生まれた<第三の道>の構想がレプケのその後の思想展開の基礎となったこと——著者のいう「ドイツ自由主義経済学」生誕の指標はおそらくはここに求められる——、②<第三の道>論は、戦間期の世界を危機の時代と捉え、それをコレクティヴィズムに集約した時代認識と、そうした危機をもたらしたのは<誤った合理主義>による社会の荒廃だとする歴史把握に支えられていること、そして、③中小経営や農民的農業を中心として構成される社会をレプケが思い描いた時、彼の念頭には後半生を過ごしたスイスでありベルギーであったこと、である。

他方では、より詳しく論じてほしかったと感じる論点も残された。

レプケは、当初から経済における〈人間的要素〉や〈心理的要素〉を重視していたし、のちには西洋文明全体を視野のうちに収めて、国家のあり方や社会全般を対象とした社会諸科学の総合の必要性を訴えた。そうした社会思想家としてのレプケの側面が本書では後景に退いていることが惜しまれる。著者は経済学に焦点を絞った問題の設定をしているのだから、これはある意味で当然である。ただ、以下に述べることもかかわって、レプケの本領はより広い枠組みのなかでよりはっきりと捉えることができるのではないか、と思われるのである。

レプケの〈第三の道〉に関する評者の不満は、レッセフェールとコレクティヴィズムの両極を排するという国家干渉の内容とその限界についての叙述がなお抽象的なものにとどまっていることにある。国家の役割・限界を説くには、市場経済のどういう点に問題があり、それに対してどのような介入ないし干渉が必要であるかが具体的な論点として示されねばならず、そのためには経済理論が彫琢されなければならない。しかし、レプケの思考はそうした方向には向けられず、経済外の世界に延びていった。これはこれで「ドイツ自由主義経済学」の一つの特徴をなすものかもしれない。しかし、隔靴搔痒の感は抑えがたい。著者は、〈第三の道〉とほぼ同義に用いられる〈社会的市場経済〉の「社会的」という形容詞について、「曖昧模糊としている」、「わかったようでわからない」(519, 520ページ)という感懐を吐露している。これと同じような想いである。

中小経営や農民的農業を中心として構成される社会の構想に対しては、青年自由派からの、〈後戻りの道〉、《経済的ロマン主義者》という批判が紹介されている。レプケの構想は、現代経済が孕む問題点の指摘としては傾聴すべき点を多く含む一方、巨大企業を軸として編成され高い成長力を示してきた20世紀資本主義の現実に対する代替案としては無理がある、というのが

『ドイツ自由主義経済学の生誕——レプケと第三の道——』

評者の印象である。その当否を含めて、この点についての著者の考えをきかせてほしい。

アデナウアーの依頼によってレプケが戦後ドイツ経済についての報告書を執筆し、「社会的市場経済」を正当化していたことを考えると、それと現実のドイツ経済の動きとの関係でも、重要で興味深い問題群が浮かび上がってくる。いくつかの例をあげてみよう。独占禁止法のなかに＜社会的＞なるものの内容を読みこんでいたレプケは、現実の巨大企業の事業展開をどのように評価していたのであろうか、また、戦後の労働政策や雇用システムの展開はどのように捉えられていたのであろうか、さらに、ベヴァリッジに対して批判的であったレプケはドイツの福祉国家、とくに社会保険制度をどのようにみていたのであろうか。これらは既に本書の範囲をはみ出しているけれども、「社会的市場経済」論にとってもドイツ経済の特質を理解するうえでも重要な問題であろう。

以上、レプケ論を手掛かりとして思いつくままの感想を述べた。さきに触れた構図や読解の問題からより個別的なそれまで、本書をめぐる議論・検討されるべきことは他にも多く残されている。様々な方面からの活発な議論によって、現代資本主義やドイツ経済学の特質についての認識が一層深まっていくことが期待される。